

氏名	近松 博郎
ヨミガナ	チカマル ヒロオ
学位の種類	博士(音楽学)
学位記番号	博音第283号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	(論文) J. パッヘルベルの声楽マニフィカト研究——その様式と役割に関する考察——

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授 (音楽学部)	大角 欣矢
副査	東京藝術大学	教授 (音楽学部)	土田 英三郎
副査	東京藝術大学	准教授 (音楽学部)	西間木 真
副査	東京藝術大学	准教授 (音楽学部)	福中 冬子
副査	武蔵野音楽大学	教授	寺本 まり子

(論文内容の要旨)

J. パッヘルベルは生涯をオルガニストとして過ごし、器楽・声楽を問わず多くの作品を残した。中でも彼の声楽マニフィカトは、様式的に高度な円熟味を示しており、おそらくそのすべてが、パッヘルベルが聖ゼーバルト教会のオルガニストに就任してから没するまでの最後の約 10 年間に書かれたと推測されている。コルネットやティンパニを伴う大規模な編成のための作品も多く、2つの合唱と2つのオーケストラのための作品も存在する。『パッヘルベル声楽作品全集』が刊行・完結されたことにより、今後この分野が研究・開拓されるための画期的な材料が調えられたといえる。

本研究はパッヘルベルの声楽マニフィカト 13 曲すべてを対象とし、パッヘルベル作品の新たな特徴を客観的に浮かび上がらせようとする初の試みである。研究のプロセスとしては、まず 17 世紀後半のニュルンベルクにおける典礼における音楽の用いられ方について確認した。続いてパッヘルベルの声楽マニフィカトを伝える楽譜資料について述べた後、各曲の分析を行なった。各曲の概要は表にまとめて全 13 曲の比較対照をしやすくし、分析から明らかとなった特徴を総括した。

次に当時の声楽マニフィカトの創作状況について述べた。とくに『ボーケマイヤー・コレクション』に収められた作品を概観し、そのうちパッヘルベルとの比較に有用と思われる 2 作を取り上げ論じた。こうしてパッヘルベルの声楽マニフィカトと比較対照し、パッヘルベル作品の特性をさらに際立たせることを試みた。このようにして得られた成果を踏まえ、パッヘルベルの創作活動と生み出された作品を当時のニュルンベルクにおける典礼、とりわけ晩課というコンテキストに戻し、パッヘルベルの音楽が担ったと考えられる役割について最後に考察を加えた。

これらの研究で改めて明らかとなるのは、パッヘルベルの声楽マニフィカトがそれぞれにいかに多様で、またいかに手が込んでいるかということである。彼の作曲家としての熟達ぶりをとりわけ示しているのは、対位法的書法が駆使されている部分、とくにフーガである。こうした側面はこれまでの研究でも指摘されてはきたが、その一つ一つについて具体的に論じた例は乏しかった。今回声楽マニフィカトを題材とし、その極めて精緻で巧妙な側面を実証的に論じることで、パッヘルベルの作品様式に関するこれまでの見方をより豊かで、事実即したものにすることができたと思われる。このことはさらに、作曲家としてのパッヘルベル像についても新たな視座を提供し、彼がいわゆる「学術的な音楽家」として評価されるのにふさわしい知識と技術を持ち合わせていたことを確認することにもつながるだろう。

今回は十分には行えなかったが、パッヘルベルのどのような様式が、彼が学んだとされるウィーンやイタリアの作曲家に由来すると考えられるのかに関して、具体的に研究した例はなく、今後の研究課題としたい。そもそも 17 世紀の声楽マニフィカトの様式史研究そのものが、まだほとんど行われていないのが現状であるが、今後広く研究が進められるべき分野である。本研究は、17 世紀ドイツのプロテスタント都市における声楽マニフィカトの実証的様式史研究という観点からも、新たに小さな第一歩を踏み出すものになると思われる。

(総合審査結果の要旨)

本論文の研究対象はヨハン・パッヘルベルの声楽マニフィカト全 13 曲である。声楽マニフィカトは晩年のパッヘルベルが特に力を入れた創作分野であり、本レパートリーの研究は、作曲家パッヘルベルに対する適切な評価や、ドイツ・バロック期宗教音楽史のより深い理解のために重要な意味を持つ。同作品群に関する先行研究が概略的な記述にとどまってきた中で、2015 年完結の『パッヘルベル声楽全集』とその資料研究の成果を活用し、初めて 1 曲毎の詳細な分析を通じてその特色を具体的に明らかにしようとした試みの成果が、本学位申請論文である。

申請者はまず、対象作品群成立の背景をなす 17 世紀後半のニュルンベルクの教会音楽を取り巻く状況、特にマニフィカトが演奏された聖ゼーバルト教会における晩課の様相を略述する(第 1 章)。次にパッヘルベルのマニフィカトの楽譜資料について先行研究に基づいて記述した後、各曲の分析を行ってその結果を表にまとめて示し、そこから明らかになった特徴を述べている(第 2 章)。また、当該作品の音楽史的な位置づけを明らかにするため、各種資料目録を精査し、中部ドイツを中心としたドイツ語圏におけるマニフィカト作品一般の伝承状況を概観する(第 3 章)。さらに、同時代にドイツ語圏で流通していた楽曲の大規模な集成である「ボーケマイヤー・コレクション」所収のマニフィカト作品から選んだ楽曲と比較することで、パッヘルベル作品の特性を浮かび上がらせようとしている(第 4 章)。

以上の研究により、各曲における独創性溢れる多様な様態と高度な音楽性、とりわけ熟達した対位法手法を駆使した「学識性 Gelehrsamkeit」が具体的に確認され、本作品群が「パッヘルベルの創作の頂点」と評される所以が実証的に検証され

た点は、本研究の貴重な学術的成果として評価できる。その一方で問題点も多い。表による分析結果の提示は、多楽章バロック声楽作品の構造把握には有効な手段であるものの、そこから読み取れる事柄の解釈があまりにも不十分にしか行われていない。歌詞の構造や意味と音楽の関係についても踏み込んだ議論がなされておらず、バッヘルベル作品のその点における独自性を明らかにするには至っていない。また、ドイツ語圏におけるマニフィカト作品の伝承状況は単なるデータ提示の域を出ておらず、「ボーケマイヤー・コレクション」所収作品との比較も、サンプル数が少なく記述も短いため、端緒的な指摘をなすにとどまっている。

こうした多くの問題点はあるものの、この研究領域で初めて行われた前述のような作業の意義と、本研究が今後のバッヘルベル研究、ひいてはバロック期の宗教声楽音楽研究に対してなし得る基礎研究としての寄与に鑑み、博士の学位を授与するにふさわしい成果と判断する。